

情報公開連絡会について（追加質問2）

【ご意見・ご要望】（投稿日：2016年7月25日）

投稿日4月19日の「情報公開連絡会について」という意見に対し、副学長自ら投稿に対する積極的で恣意的な誤読を行っていると言う点、及びその誤読さえも的を射たものとなっていないという点をお知らせし、私は本件の投稿者ではないが大変重要な議論であるため、最後に私の意見を付け加えて、もう一度この問題について回答を要求する。

(1) まず、投稿者は「(ごく一部、副学長を叩く場所と勘違いしておられる方もいらっしゃるようですが)」と書いている。重要なのは、「ごく一部」という点だ。一方、回答では「ご意見にありますように、現在は、一部の学生等が、一方的な主張を繰り返し、大学側に詰問口調で問い詰める場となっています。また、以前からも、意見交換の場というよりもむしろ「団交」のように一方的な主張を大学側に呑ませるような状況にありました。」とあるように、あたかも情報公開連絡会が一部の学生に支配され「大学側に詰問口調で問い詰める場」でしかなくなっている、と投稿者が書いているかのように書かれている。これは明らかな誤読である(もしくは書き方の問題か?)。投稿者の強調点は「Face to Face で有意義な意見交換・意見共有を行える場所であるという側面もある」ということであり、その後ろの()で括られている部分が大げさに取り出され、「ご意見にあ」る意図を明らかに逸脱した主張を投稿者も(回答者である副学長と同じく)持っているかのような文章になっている。また投稿者の重視したFace to Faceの利点についてのコメントが回答に見当たらないのもきちんと投稿が読めていないとしかいいようがない。

(2) では本当に情報公開連絡会は「大学側に詰問口調で問い詰める場」でしかなくなっていたのか。情報公開連絡会は初め30分ほどは大学側からが学内会議の決定事項などの説明があり、その後、学生の質問が許されるという形になっている。この質問は前半の副学長の説明に対する質問もなされるし、それ以外についての質問、更には学生生活上の意見などがなされる(「意見」というのも性別等に関係なく誰もが使えるトイレを増やしてほしいと言うものから、投稿者や副学長が想定しているであろう強い意見など様々だ)。ここでは確かに「ごく一部」の学生が副学長を詰問することもあるし、それが少々長引くということもあるが、他の学生から穏当な質問もなされる(学費の値上げについての建設的な質問・意見交換が所謂同学会と副学長の間で交わされたことすらある)。よって「問い詰める場」でしかなくなっているというのは明らかな間違いだ。この点については、毎回の連絡会への出席者が少ないことをいいことに一方的な「情報公開」観を他の学生に植え付け、連絡会の意義を恣意的に卑小化していると取られてもおかしくはない。

(3) 私の意見としては2点ある。

一つ目、情報公開の場で「問い詰める」のはある意味当たり前である。情報公開制度では公開して欲しい情報を公開主体に「そんなの存在しない」と主張されると、それが存在しているとの証明を請求者が行わなければ、公開する義務はない。学生という立場から本

格的な学内調査が行えないのは自明であり、だとすればその場で関係者の発言の矛盾点を突いていき強い口調で何らかの証言を引き出そうとするのは当然のことである。実際の事例を見ても、学内での軍事研究に関する検討委員会のようなものがあり、その検討がどこまで進んでいるのかという質問に対し、最後まで、そういった委員会があるのは把握しているが、検討の如何は知らないといった回答が繰り返されたことがあった。これなど本当に副学長が把握していないのかどうかというのは学生に知り様がない上、問題の性質上学内外の関心は当然高く、学生が詰問口調になるのは当然であった。明らかに行き過ぎた怒号は別として、詰問するという態度はある程度しようがないものである。

二つ目、学生意見箱は連絡会に比べ明らかに劣っている。意見箱では記名式なので、意見者は名前を知られてしまう。これでは当局に不利な意見は出しにくくなるだろう（いくら「投稿者の氏名・学籍番号などの個人情報に厳に秘匿し、いただいた個人情報は本学の学生支援の充実の目的以外には使用しません」となっているとしても学生が委縮するのは当然である）。また、意見箱では解答時間が異常に長くなる。本件でも投稿は4月なのに回答は7月11日であり、その間二回もの連絡会が理由も知られず中止となっている。重要な問題について、即座に答えられないものが連絡会の代わりとなるなど言語道断である。

以上、質問の精読及び私の意見も踏まえて、情報公開連絡会についても一度回答を要求する。

【回答】（回答日：2016年9月2日）

（学生担当理事・副学長 川添信介）

今回頂戴した更なるご質問に以下のとおりに回答いたします。

最初の投稿を私が誤読しているのご指摘については、表現上不十分な点があったとしたらお詫びいたします。しかし、私の先の回答の趣旨は、情報公開連絡会の Face to face の対話の場としての意義よりも、情報公開連絡会が「一方的な主張を繰り返し、大学側に詰問口調で問い詰める場」となっていたことの弊害の方が大きいという点を指摘することになりました。この弊害にとっては、そのような「団交」的な姿勢を示す学生諸君が「一部」なのか「ごく一部」なのかは本質的な問題ではないと考えます。「団交」的ではない形（少人数、氏名等を名乗る、時間を区切るなど）での、学生諸君との Face to face の話し合いには応じる用意があります。

第2のご指摘の点についても、情報公開連絡会がまったく何の意義も有したことがなかったと言うつもりはありません。メリットとデメリットの比較の問題です。

最後にご意見の1点目「詰問するという態度はある程度しようがないものである」というお考えについては、それだけを抽象的に取り出してみる限りは、了解できます。しかし、実際上は「怒号」と「詰問」の区別は付けがたい場合が多く、また従来の情報公開連絡会は「明らかに行き過ぎた怒号」が現に存在した場であったことを指摘しておきます。また、2点目のご意見は、学生諸君と大学「当局」との間の対立関係を前提としたものとしか理解できず、同意できません。